

2022年3月27日（日）「中庸の道」

列王上 18:20-21

20 アハブはすべてのイスラエルの人々に使いをやり、預言者たちをカルメル山に集めた。
21 エリヤはすべての民に近づいて言った。「あなたがたは、いつまでどっちつかずに迷っているのか。もし主が神であるなら、主に従いなさい。もしバアルが神であるならバアルに従いなさい。」だが民は、一言も答えなかった。」

今日は 2021 年度最後の主日となります。年末、年度末といった節目の時を用いて、自分自身の生き方、教会の歩みを見直すべく、『狭い道』という本から語らせていただいております。一つの章を何度も読み直し、自分の中で消化し、私の言葉に直して皆様にお伝えできるよう努めています。

今日は第2章の「中庸」というテーマを扱います。昨年末には「尾根の中央を行け」と題して語らせていただきましたが、そこでは信仰の道が山岳の尾根に例えられていました。等高線の出っ張った所をつないだ細い道を、両サイドの崖に転落しないよう気をつけながら歩き続ける。両サイドの崖とは「自己義認」と「墮落」という両極でした。正しくあろうとしすぎて他者を裁く者となる危険性もあれば、罪が常習化して神をすっかり忘れてしまう危険性もある。著者は、注意深く「中庸の道」を選び取るよう勧めるのです。中庸の道をよく表す聖句として、コヘレト 7:16-17 が挙げられています。

あなたは義に過ぎてはならない。賢くありすぎてはならない。どうして自ら滅びてよかろう。
あなたは悪に過ぎてはならない。愚かであってはならない。あなたの時ではないのに、どうして死んでよかろう。

この箇所は以前、講解説教の中で扱いました。しかし、この中庸の生き方というのは誤解が伴いやすいため、どのようなところに注意しなくてはならないかが教えられていません。

「大多数の人がそうだと思いながらも、実際中庸の道に行くことはさほど簡単ではありません。そこにも危険が待ち伏せています。バランスを推奨しながらも、穏健は妥協へと下る可能性があるのです。」(p.29)

ここで言われていることは、パウロが警告するところの「この世と調子を合わせる」(ローマ 12:2) 生き方でしょう。主を信頼することに徹底できなくなり、より安易な道を探し始めているかもしれません。長いものに巻かれていた方が楽であるという感覚に、いつしか温々と浸かっているかもしれません。

「信仰について言うならば、私たちは信じてはいても、身を入れることができなくなるのです。真剣になる決心をしても、真剣になり過ぎることができなくなるのです。両者の最善の部分を選ぼうとして、思いを開き、ニュートラルギアに心をセットした民となることが可能なのです。」(p.29)

自分の信仰生活に「妥協」が入り込んでいないかどうかを調べるには、いくつかのチェックポイントがあると思います。まず、朝起きたとき一番に見るもの、考えることを確認しましょう。それが「神のことば」であることが何よりも重要であります。すぐにそれを手にとって開けるように、常に聖書や祈りの本を手元に置いておくことが大切です。そうでないと、私たちの思考はこの世の事柄ですぐに一杯になってしまうからです。私自身も何かつけてスマホに手が行ってしまう人間ですが、一日の最初にはそれを触らないよう、まずその日の祈りの箇所を読むように気をつけています。

もう少し広い視野で見たチェックポイントとしては、やはり礼拝を第一としているかどうかは挙げられるでしょう。礼拝とは、自分の人生にとって何なのかをもう一度自らに問うてみたい。私たちを罪より贖い、永遠のいのちを与えてくださった神を礼拝することは、私たちの永遠と関わる事柄であります。しかし、この世の生活に追われる私たちは、見えない神を第二に置こうとする傾向があるのです。何事も積み重ねによって人生は形成されていきますが、礼拝を積み重ねることもできれば、礼拝しないことを積み重ねることもできるのです。

もう一つ付け加えるならば、私たちの時間やお金の使い方を見ると、自分が何を優先して生きているかが見えてくるでしょう。時間やお金は、私たちの人生そのものと言ってもよい。それらとどう関わって生きているか、その用い方や目的に神が見えるかどうかを、今一度確かめてみたいのです。

著者は、旧約イスラエルの二つの時代を取り上げて、このことを説明しています。まずヨシュアの時代、イスラエルの民が約束の地に入ったとき、彼らは土着の宗教に基づく慣習に従うか、主なる神様の養いに信頼するかが問われました。そのときにヨシュアが投げかけたことばを引用しておきましょう。

今こそ、あなたがたは主を畏れ、真心と真実をもって主に仕えなさい。あなたがたの先祖が、ユーフラテス川の向こうやエジプトで仕えていた神々を取り除き、主に仕えなさい。もし、主に仕えることがあなたがたの気に入らないのなら、ユーフラテス川の向こうにいた先祖が仕えた神々でも、今あなたがたが住んでいる地のアモリ人の神々でも、あなたがたが仕えようと思うものを今日、選ぶがよい。しかし、私と私の家は主に仕える。(ヨシュア 24:14-15)
イスラエルの民は、常に「この世」か「主」かどちらを選ぶかの間でグラついていまし

た。これは彼らだけの問題なのではなく、現代に生きる信仰者の問題そのものでもあります。私たちもまた「この世」に生きている存在であり、何を第一とするかが問われ続けています。主を愛する以上にこの世を愛し、神を畏れる以上にこの世を恐れるということがあり得ます。預言者エリヤの時代にも、民は豊穡の神バアルを慕い、叱責を受けています。

エリヤはすべての民に近づいて言った。「あなたがたは、いつまでどっちつかずに迷っているのか。もし主が神であるなら、主に従いなさい。もしバアルが神であるならバアルに従いなさい。」だが民は、一言も答えなかった。(列王上 18:21)

中庸の道を行こうとするとき、私たちはそれを「妥協の道」と捉え違えてしまう危険性がある。主イエスは、救いに至る門は狭く、その道は細いと言っておられます。

狭い門から入りなさい。滅びに至る門は大きく、その道も広い。そして、そこから入る者は多い。命に通じる門は狭く、その道も細い。そして、それを見いだす者は少ない。(マタイ 7:13-14)

「狭い門」をくぐった先に「細い道」があります。一方、「大きい門」をくぐった先には「広い道」があります。救いの門は狭く、そこをくぐるためには多くのものを捨てなくては入れないと言われている。時として、これまでに培ってきた価値観や自分が愛してやまなかったものを捨てる必要があるかもしれません。そのようにして私たちは入信し、神を第一とすると心に誓いました。そして、その先の「細い道」には、主イエスが山上の説教で教えておられる「キリスト者の生き方」があります。「やられてもやり返すな」「7を70倍するまで赦せ」「呪う者を祝福せよ」「迫害する者のために祈れ」等々。この困難な険しい山道を注意深く歩いていくのです。主イエスの背中を見て歩くとは、そのような道を選択し続けることを意味します。

著者は、「妥協」という中道を歩んだリーダーたちの例を紹介してもいます。その典型的な人物として、主イエスを十字架に送る決定をしたポンテオ・ピラトが挙げられています。

「イエスを処刑したローマの総督ポンテオ・ピラトは、その道をたどった古典的な例となっています。ヨハネの記録(目撃者として彼が書いたと思われる)によると、困難な道を切り抜けようとして、少なくとも三度、民の前に現れては消え、また現れました。彼は、訴えられたことについてはイエスが無実であることが分かっていたましたが、なだめるべきユダヤ人の群集と守るべきローマ法のはざまにあって、逃げ道を見つけなければなりません。しかし、群集は『もしこの人を釈放するなら、あなたはカイザルの味方ではありません。自分を王だとする者はすべて、カイザルにそむくのです』と言い、ピラトは追い詰められました。ユダヤ人はローマ人と団結してイエスに敵対したの

でした。ピラトは完全に身を引く決断をし、この一件に関して手を洗ったのでした。ポンテオ・ピラトは自分自身の中道を取り、どちらの側に付くのもなく、ただ自分自身の保身のための道を選んだのでした。」(p.32-33)

このピラトの例は、私たちの内に潜む「弱さ」を明らかにしており、私たちもまた例外ではないことが悟られます。この記事を読むとき、少なからぬ胸の痛みを感じない人はいないでしょう。神に従うところには「代価と犠牲」が伴います。この世の法に従って生きる私たちであります。最終的には神と自分との契約に立つことが求められているのです。自分の中で、神に対してどう生きるかを決めたことがあるでしょう。それを破っても人の目には見えないかもしれません。そこに妥協は生まれやすい。見えない神に対してどう生きるかが私たちに問われていることであります。

昨年10月24日に櫻井圀郎先生が多摩ニュータウンキリスト教会でダニエル書から説教されたところから大変教えられました。ダニエルはこの世の法に対してどこまでも忠実であった。しかし、それ以上に神との契約に対して忠実であったため、この世の法で「王以外の存在を拜む者は死刑とする」という規定が設けられたときにも、いつものように一日に三度の祈りを東の窓を開けてささげました。隠れて祈ることもできたのに、彼はあからさまにそのようにしたのです。彼は神との契約を守り、その結果この世の法によって裁かれてライオンの穴に投げ込まれました(神は彼の命を守られました)。彼はこのように、神の法とこの世の法の両方に従ったのです。

私たちが目指すべき「中庸の道」とは、「妥協の道」ではなく、神と人に対する忠実な生き方です。いずれもおろそかにしてはいけないと、主イエスは言われます。

彼らは、「皇帝のものです」と言った。すると、イエスは言われた。「では、皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい。」(マタイ 22:21)

主イエスは教えるだけでなく、その生き方／死に方を通して模範を示されました。主は、神に対してどこまでも忠実であった結果、この世の法廷で裁かれたのです。私たちにとって信仰の「中庸の道」とは、神との契約に立ち続ける道であります。

【祈り】

人に真実な心を求め給う、天の父なる神様。私たちは「神に従う」ということにおいて、常に現実における選択が迫られています。その葛藤は自分の中にあり、あなたとの関係の中ですべてを判断していかななくてはなりません。この世はそれと異なる道を呈示してまいります。私たちに主の御心を見極める目を与え、真実な心であなたに仕える道を選び取っていくことができるよう、お助けください。この一年の歩みを振り返るとき、悔い改めるべき多くのことが心に示されます。祈りつつ 2021 年度を締めくくり、御言葉とともに新年度を歩み始めます。この教会の進むべき道を聖霊が指し示しててください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、

ご自身の民を愛し、真実な心で仕えることを求め給う、父なる神の愛、
神と人に従い抜く道を、身をもって示し給うた、主イエス・キリストの恵み、
祈りと御言葉により、神の御心を悟らせ給う、聖霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。